
Blood*Beat -Act.K-

石川武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blood*Beat -Act-K-

【Zコード】

Z6914A

【作者名】

石川武

【あらすじ】

復讐を果たすためにその力は在るのか。取り戻すことの出来ない日常は、非現実の今を嘲笑いながら去っていく。理不尽と混沌に侵された世界で、彼が掴んだ“未来”。それは望まれたモノなのか、それとも…現代を舞台に、能力に目覚めていく少年少女のバトルストーリー。望んで手にした力。望まずして振るわれる刃。運命と言う言葉に抗う『十代のレジスタンス』の物語です。

「…ケイス…入るよ?」

軽くノックをしたあと、少女は部屋の扉を開けた。

「……」

六畳の部屋。一つ残されたベッドの上に、達騎ケイスは仰向けに寝そべっていた。右手につままれた純銀の指輪を呆と眺める姿は、何を考えているのか、長年一緒にいた少女にも解らない。と、やつと彼女の存在に気が付いたのかケイスはチラリと視界を動かした。

「…なんだ、ルカか…ノックくらいしろよ…」

ケイスはベッドを軋ませながら、上半身を起こした。

「ノックしたよ…」

ポツリと呟くルカ。

「…そっか」

静寂に包まれた部屋では、充分に聞き取れる。指輪をしまい、ベッドの縁に座りなおすケイス。

「それ、お兄さん?」

部屋の入り口に近い壁に寄りかかり、ルカはいたわるかの様に聞いた。ケイスは軽く息を吐き、肩を落とした。

「…昔さ、兄さんに頼んだ事があつてさ。俺にも同じヤツをくれーつて…したら

「死ぬまでやらねー」

つてさ…まさかこんなに早いうちに貰えるなんてな…はは…」

「……」

氣まずい空気が流れる。沈黙を破つたのは他でもないケイス自身だった。

「…準備、出来たんだろ?これからはお前んちで世話になるんだ。オジさんやオバさんを待たせてちや悪いからな、さつさと行くか

後ろ向きな考えを振りきるかのように、ケイスはルカに軽く笑つて見せた。

その心に小さな、しかしつきりとした憎悪を宿して…

午前一時。

深夜の闇のなか、自分の飢えを補うかのように少女は“何か”をむさぼっていた。這いつくばる様な姿、それはまるで獸だった。

グジュリ…ズブ…クチャ…

「…足りない…」

“返り血”を浴び紅く染まるのも意にかいさず、彼女は“人だった”物を喰らう。

「…やっぱり…彼を…彼の“力”を…」

ゆっくりと立ち上がり、頭上を見上げる。その表情は想い人を想う乙女の表情。愛惜しい、愛惜しいという感情がありありと伝わる。ただ一つ、その想いが誰へ向けられているモノなのかは、彼女以外、誰一人として知るよしもない。

そして、この少女こそが事件の主犯者だという事も…

- Blood* Beat -

目が覚めると、そこは見慣れない部屋だった。

(…ここは…?)

辺りを見渡す。見慣れない、いや、そこは何度も来たことがある部屋だった。

(そうか…ルカンちか…)

昔、二人でよく遊んだ紅葉家の空き部屋。まさか自分の部屋になるとは、幼い頃は思いもしなかつただろう。

(“もう”こんな時間か…)

枕元にあるアナログ時計を見ると、六時を指していた。

（…あ…メシ、もう作んなくていいんだっけ…）

いつもなら兄のために早起きして用意していた朝食も、今は必要な
い。手持ち無沙汰な感覚を覚えながら、ケイスはもう一度布団に潜
つた。

（…もう少しだけ寝よう…）

霞んでいく視界のなか、ケイスはちいさな人影を見た気がした。

目覚めの歌は、まだ緩やかで、それは川のせせらぎにも似ていた。

- Blood* Beat -

窓からさしこむ朝日を眺々しく思いながら、ケイスは体を起こした。そこはやはり自分の部屋ではなく、しかし、今は自分の部屋だった。寒気を感じたが、なるほど、寝る時に窓を閉め忘れたらしい半開きのままになっていた。

季節は秋の終わり。やけに冷える明け方と夜。北風も吹き出し、凍てついている。

寝起きのダルさを振り払つよう、一つ背を伸ばし、ケイスはベッドを出た。制服は昨日の内にダンボールから出してある。ハンガーにかかつてあるそれに着替え、一日を始めよう。新しい日常を始めよう、と。

- Blood* Beat -

当たり前のように学校へ向かう生徒達のなかにケイスは居た。隣にはルカが何かを話していたらしかつたが、彼には届いてなかつた。割り切ろうとしても、なかなか簡単にはいかない。今朝から身に染みて感じていたことだった。

「つて、聞いてる?」

不機嫌そうに眉根をよせて、ルカが話しかけて来た。

「ん、ああ……」

ルカ自身も辛いのだ。彼女の、兄の事を見る目は憧れのそれに近いものだったのだから…

歯車は噛み合い、針が時を刻だす。動き出す。人の感情が、衝動が、決意がそれの原動力だった。

さあ、“新しい日常”を始めよう。

その先に何が待ち構えようと、目を背ける事は許されないのだ。

「邪道だ」

何の脈略もなく唐突にそんな事を言つたのは、ケイスの前に陣取つた小嶋ダイスケだった。

「…は？」

「いや、だから邪道なんだよ」

訳も解らないまま顔をしかめ、昼飯の焼そばパンに喰らい付く。ダイスケは眼前に並ぶ二つのメロンパンを睨みつけたまま動かない。ふと、メロンパンをよく見る。

「…クリームか」

「クリームだ」

またか、とケイスは大袈裟に肩をすくめた。コイツはどうしてもどうでも良い事に労を費やすのか、長いこと一緒にいたがいまだに理解できなかつた。

「何故にメロンパンにクリームを入れるのだ？メロンパンとはクッキー地とそれに包まれたパンのモチモチとした食感のギャップがたまらんのに、なぜあえて異物を混入する必要があるのか！？」
パンッ！と机を叩き、同意を求めるかのようにケイスを凝視するダイスケ。同意を求めるというよりは脅迫じみていたとは口が裂けても言えない。それに、メロンパンにここまで熱くなる人間が居て良いのだろうか？

「…俺はクリームが入つてもいいこうに構わねえけどな」

「か～ッ！解つてねえな～！いいか？そもそもメロンパンとまふあ

…」

「もういいから黙つて食つてろ」

メロンパン（あえてクリーム入りの方）をダイスケの口に押し込み、言葉を遮る。

「ウグウ…」

しばらく口をモヤつかせ、飲み込んでからダイスケは大きく溜め息を吐いて見せた。

「…大丈夫かよ」

一言、ケイスに向けて言った。

大丈夫なハズはない。

何をするにも上の空で、ガランドウで、肩透かしだ。その証拠に、気が付いたらもう昼休みになつていてる。

さつきまで焼きソバパンをもつていた右手に視線を落とす。中指にはトーマの形見の指輪が、銀色に輝いていた。

放課後。解放感と喧騒に満ちた教室は、不思議と混沌としてはいるかつた。

「今日の帰りは夕飯の買い出しするからね

朝食の時にルカがそんな事を言っていたのを思い出す。クラスが違うからしばらくここで待つていればあっちから来るか、何かしら連絡が来るだろうとふんだんにケイスは椅子に座つたまま、ダラダラと帰り支度を始めた。

教科書類の殆んどをそのまま机に残しているので、持つて帰る物は自習用の筆記用具とかノートくらいだ。支度を終えたケイスは、ポケットから携帯を取り出し適当にネットサイトを見て渡る。

「……」

上からの視線。見下ろす様に、ジツとみている。いつの間にか目の前に立っていた彼女は、別に話すわけでもなくそこに立っていた。

「……」

「……あのせ、用があるなら話してくれないと、此方としても対処のしようが無いのだが……」

「……はあ」

なんと言つか、独特の雰囲気を持つた少女だと思ひ。クラスメイトの大高サヤだ。

「用があると言えば有るかも知れませんが……多分、今は有りません

「どうちだよ」

「有りません」

「……あ、そう」

もう一度携帯に目を移す。メールが一件届いていた。

『シタニイル』

ル力だ。何故にカタカナなのか非常に気掛かりだが、あえて伏せておこう。

「…じゃあ、俺は帰りますんで…」

「はあ、さようなら」

イマイチ会話が成り立たないまま、ケイスは教室を後にした。途中、ダイスケが何やらわめいていた様だったが、とりあえず無視した。

夕暮れの商店街を一人は歩いていた。時間帯的にもみて、一番の賑わいをみせる頃だらう。

「金曜だしな」

「え？」

「こっちの話。気にはんな」

そう。と、そつけなく返事を返すルカ。

当たり前の話しだが、ケイスの両手は買い物袋で塞がっている。いわゆる荷物持ち役である。

「…にしても、ちと多いな」

普段の1・5倍近くのそれらは、確実に彼の体力を削っていた。

「文句言わないの」

「…言いたくもなる」

「…休む？」

「イエス」

即答だつた。

商店街の端は駅になつておひ、そこには小さな広場があつた。発展した町にあるからか、人通りが激しい。

「はい」

「ん、さんくす」

近くの自販機で買ったジュースを受けとり、ベンチに腰を降ろす。

「…」

「…」

話す話題が見当たらないまま、喧騒にまみれた沈黙が流れる。

「…不思議だよな」

「？」

「人が一人死んだ位じゃ、何も変わらない…それがどんだけ大切な人でも、ほんどの人にとっては“他人”なんだよな…」

「ケイス…」

「…ま、変わつてしまつても困るんだけどな」

グシャリと、空になつたアルミ缶を潰す。

「うん…変わつちゃ駄目なんだよね、きっと

ふわりと笑いかけるルカの顔は、夕陽をおびてるからか妙に色っぽくケイスの目に映つた。

「……そ、そろそろ帰るか」

「? そうね」

買い物袋を持ち、立ち上がる。近くの踏み切りを越えて百メートルも歩けばもう家だ。そんなに近いのであれば着いてから休んでも良かったのだろうが、こんな無意味な時間も嫌いではないとケイスは思つた。

不意に

「! ?」

一人の少女と

「……」

目が合つた。

その少女は薄く笑うと、きびすをかえして歩き出した。

「着いて来い」

とも、逆に

「来てはいけない」

ともどらえられる表情をのこして。

「ちょ、ちょつと！キミ！」

見失つてはいけない気がて、ケイ스は駆け出していた。

「え？ ケイ스！？」

後ろから聞こえるルカの声は、しかし彼には届いていなかった。

より賑わいを増す商店街を、波をかき分けるように走る。息が上がり、心拍数が異常に上昇しているのが手にとる様にわかつた。

（クソツ…何でだ…）

走つても走つても一向に追い付かない。そう、“走つても”行き交う人が少女の姿を一瞬遮るたびに、距離が広がる。まるで何かの手品のようだ。

B100d*Beat

「クソツ…」

叱咤も口から滑る。完全に日は沈み、夜になつていた。

「コツチ…か?…だよな…」

ついに見失つてしまつた。月明かりでも、暗がり全てを照らしてはくれない。路地裏へ消えていくのを最後に、少女は幻のように消えた。

ケイスは気が付いたかのように辺りを見渡す。

（…ここは…暗くてよくわからないな…）

昼と夜とでは、同じ街でもこんなに表情を変えるものなのかなと思わせる。

（キツネに化かされたみたいだ…）

携帯の液晶を見ると、時刻は午後の九時を記していた。

「…流石に帰らないとマズイよな」

着信が貯まつた画面を見て、少しネガティブになりながらケイスは大通りを目指す事にした。

見上げると満月だつた。金色で、とても綺麗だ。

満月を背にした高層ビルの屋上に、誰かがいた。全身が白く輝いていた。まるで刃のようだ

直感ではあるが、目があつた気がした。同時に、物凄い悪寒。

ブレッシャー

「ツー？」

瞬きとともに人影は消えた。

「……げ、幻……覚？」

目がしらを押さえ、頭を振るつ。気を取り直そうとした時だった。

目の前に、ソレは立つていた。

紅い 禍々しいほどに紅い華を片手に持った。白い 凍てつくほどに白い少女。

「 ッ！ 」

それだけではない。少女の周囲、球を描く様に回転し、浮かぶ様々な剣、刃、鍵。触れた瞬間にバラバラにされるのは必至だろう。その内の一振りに滴る、紅い液体…

血。

「 …は、はは…何だよ、コレ… 」

それは怪異以外のなにものでもなかつた。

ジリ、と。あとずさりをし、駆け出そつとした瞬間、ケイスは足を滑らせて転んでしまつた。

そう、足を“滑らせ”て…

地面に着いた右手に、生暖かくまとわりつく様な嫌な感触。暗くて判らなかつた、いや。判りたくなかつただけだったのかもしないが、実際に手に着いたそれを見てしまつては受け入れざるをえなかつた。

血が、水溜まりのように広がつていた。

「 ッ！ 」

心だけが先走り、体じゅうに危険信号を送つてゐる。

逃げ（恐）る、逃（怖）げる。／タ／立つ（嫌）て、全速（死）力で走れ。／タ／助けを（斬）求める。／カ／それを（痛）全て、一度のアクションで遂げなければ（逃）いけない。／エ／でなければ、口口サレル。

結果、混乱し、金縛り状態になっていた。

ようやく立ち上がった瞬間だった。

視界が霞んだ。

平行感覚を失つた。

バランスを崩した。

再度、地面に臥した。

その光景を、少女は不気味に笑いながら見下ろしていた。

（くそ…何だってんだ！？）両手を使い、立ち上がるよう試みる。

「あ

間抜けな声をもらして、ケイスは気が付いた。

自分の左腕が“無い”事に…

路地裏に響く断末魔は、虚しくも強烈なビル風によつてかき消された。

「ぐ
え
」

ガチガチと震えが止まらない。食道を遡つて、胃の中のモノがこみあげる感覚。寒い。

ボト:

花にしては重い音。顔を上げると、震える視界に映つたソレは、生々しく光沢を放つ、綺麗でグロテスクな物だつた。

案の定、自分の腕だ。

丁度、肘間接から切断されていた。切口は鏡面の様に滑らかで、血管の一つ一つがはつきりとみてとれる。

死ぬ？

「そう、あなたはココで死ぬのよ。達騎君」

卷之三

始めて聴いた彼女の言葉が物騒過ぎて、心臓が握り潰された様な感覚を得た。

「あなたのお兄さんの様に、私に食べられて。ね」「食べ兄さんが…？」

「この娘が兄さんを殺した？俺の最後の家族を…

「口口シタ？」

「彼がユーザーなら、あなたも素質があるって事にな ッ！？」
一瞬で地を蹴り、数メートル先の女に殴りかかる。自分の何処にそんな力が残っていたのだろうか？よく判らなかつた。
傷口が熱い。まるで熱した鉄板を押し当てるかのようだ。完璧に致死量に値するだけの血が出ている筈だつた。しかし、止まらない。ましてやその量は増えるいっぽうだ。

滝の様に流れる血は、意思を持つてゐるかのように舞い上がる。

それは怒りだつた。
それは後悔だつた。
それは憎悪だつた。
心の奥にしまいこんでいた感情が溢れる。
ドクン！と、心臓とは違つ“何か”が、大きく、身体全体を奮わせた。

少女を殴り飛ばしたのは、まぎれもなく自分の傷口から“生えて”いた。

三ツ又の鞭。

紅く、ほんの少し透明な“血”の色。その一本が、さながら弾丸の様に走ったのだ。拳大の尖端は、鉄球にも見える。嵐の様に感じたのは、すなわち“高速の鞭”だったのだ。空を斬る音が静かに響く。
「…行使ツ！？」^{アレリティドライヴ}私の能力に寄せられたか…目覚めるには早いと踏んでいたけど、とんだ誤算だつたようね…」

小さく舌打ちをならし、壁に打ち付けられた肩を抱く少女。不意打ちだったらしく、ダメージは大きかった様だ。

「…ツ！ウグツ」

傷口に視線をおとしたケイスは、酷い吐氣に襲われていた。エタイの知れない物が、自分と神経を共有しているという異質感。鼻孔を突く、鎧びた鉄のような臭い。

剥き出しの神経を撫でる、夜風。

その全てが不快感をあおり、結果的に吐氣となつてているのだ。
(なんなんだよツ！？何がどうなつてんだよツ！？)

ケイスは、自分でも判る程に動搖していた。助けを求めるかのように右往左往する視界は、しかし、求めるモノを見付けられないまま、再び怪異へと吸い込まれていった。

(…あ、アイツか？アイツのせいなのか？…そ、そうだ！そうに決まってる！アイツが兄さんを殺した所から“狂い”始めたんだ！アイツが悪いんだ！アイツは…仇ツ！)

そう、仇だ。

“仇”とはすなわち“敵”。憎むべき、打ち滅ぼすべき、その存在を完全否定するべき存在なのだ。

殺意は更に研ぎ澄まされていく、

三本の鞭は束ねられ、
切り裂く“爪”へと貌を変えた。

「……は、はは……」

その貌を認識した瞬間、ケイスは本能的に理解した。

コレは命を奪うために在る“モノ”だ、と。内に秘められた力を理解したケイスは、こみ上げてくる愉悦感をさえらげずに笑みをこぼす。

感覚を確かめるように、握つて、開いてを数かい繰り返す。自分の肉体とその塊との境目からは、動かすたびにパラパラと黒い粉が落ちていた。多分、乾いた血だろう。

不意に、視界が塞がる。少女が、一瞬のうちに触れるほどまで距離を詰めてきたのだ。

不適な笑みをたたえる彼女の両手には、針身の剣シヤビニアが握られていた。確かあれば敵を突き刺すスタイルの、西洋の武器だ。視線を少しそらすと、それと同じ物がケイスを取り囲むように浮いていた。

「予定変更よ。そこまで位階が上がっているなら充分。達騎君の“

レポート
遺記”：私に頂戴……」

十一の斬撃が一斉に放たれる。その矛先が何の例外もなく、何の迷いも躊躇いもなくケイスの心臓へ向かってきた。

「……」

どの剣も必殺の力を秘めているのは確実だった。いや、そもそも凶器に殺傷能力の無いものなど無い。ましてや、急所へ向けられたあかつきには、まさにそれは“必殺”なのだから。

でも、そんなのに臆する事は無い。そう、一振り。ほんの一振りだけ、この力で薙げはいい。それだけの“仕草で”事は足りてしまう。

それほどまでに彼女の力は脆弱だ。数に物をいわせた戦い方なんて、今のケイスには通用しないし、するはずもないのだから。

力を手にした人間は、欲望に駆られる。

力を振るいたいという欲望に…

血の軌跡に掻き消される剣たち。灰となり、塵と化す。

ケイスの左手は、超超高熱の刃と化していた。

自分の肉が焦げ、辺りに死臭にも似た臭気が充満する。

血の塊と肉体の接合点からたちこめるそれは、脳髄の奥底を蝕んでいった。

意識を保とうと歯をくいしばるが、臭気に圧され、食道を胃液が遡るばかりだ。

「はあ……ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ！」

殺氣を殺氣で反すように咆吼。左手の爪を勢い良くアスファルトに突き立て、全体重を乗せて”引く”。ギチギチと千切れるかと思えるほどに伸びた腕は、瞬刻の後にケイスの身体を矢の様に跳ばしていた。

「コウツ！」

血風を纏い、『小規模×強大』の嵐と化したソレは、眼前の敵を捕らえた。

「クツ……！」

幾つもの大剣を盾に後方へと跳躍する刃使いの少女。が、重圧なソレもガラスの様に碎かれていく。

百有るものが十。十有るものが一へ。瞬く間に壁際へ追い詰められた少女は、その残る一振りの大剣を壁面に突き立てた。タンツ、と軽く、浮く様に跳躍。刹那、壁を嵐が碎いた。

「……ハアアア……」

ガラガラと瓦礫の山を崩し、コラリと立ち上がる様は、まるで『悪鬼』の様だった。

——イ：

普段の彼からは想像できないほどの歪んだ笑み。力を抜き、ガクンと体勢を落とした瞬間、滑走。

ドカツ！

一撃。鉄鎌の「」とく降り下ろされたケイスの左腕は、見事に少女のミゾオチを打ち抜いた。皮膚を”焦がす”感触が、狂ったケイスの感覚を酔わす。

風を切る音をたて、壁に打ち付けられる少女。

「アアアアアアアアツ！」

追い討ちをかけるべく、ケイスは首根を掴みにかかる。息遣いを感じれる程距離をつめた時、

小さく息を呑む様子が解つた。

さながら熱した鉄を押し当てられた様なもの。声すらも出せないだろつ と。しかし、ケイスの左腕は少女の首を掴むにいたらなかつた。

身動きがとれない。

地面から延びる白刃。ケイスを束縛し、檻のよつに閉じ込める。首から上を出す形は、断頭台のよつにも見える。
三、四センチ程刃が食い込んでいる。

血が流れる…

左腕とは違い何の力も示さず、ただ地面へと流れしていく。

いつの間にか自分を焼く熱は冷め、左腕は赤黒い塊になっていた。

掴みかからうと伸ばした左腕は、一呼吸置いて崩れ落ちる。重い痺かさぶたが剥がれ、そこには“普通の腕”があった。

「あ…」

まるでおさまる様子を見せなかつた熱が、一気にさめて行く。同時に酷い脱力感を得て、ケイスは刃が食い込んで行くにも関わらずそれに身を預ける。

「残念だつたわね。戦い馴れてないキミに負けるほど、私は弱くないわ」

威嚇するように柄の無い剣を浮遊させる。形勢を逆転し、少女は勝利を確信した。檻状の刃以外の武器を消し、ケイスに近付く。愛しい者を撫でるように、少女は彼の頬に触れる。その手は氷のように冷たかつた。

「あなたが別の血筋に生まれていたら……いえ、だからこそ私は惹かれたのかもしれません」ツ！？」

少女は咄嗟に”それ”を回避した。

先程まで彼女が立つっていた場所に、鉛弾が食らい付く。

少女の言葉を遮つたのは、一発の、いや。“一発”の弾丸だった。速射ではなく、同時に放たれたのだろう。

「…誰？」

弾道を詠み、射手を睨みつける。その瞳は既に人間的な光を放つてはいない。そこにあるのは暗く、深い闇そのものだった。純白のドレスより、それは彼女を印象づける。が、その視線すら何処吹く風と、その存在は淡々と話し始めた。

「名乗らずとも察しはつくでしょう？剣使い（チャンバラ）」

人気の無い路地では、五階建ての建物の上にいる”彼女”の声でも鮮明に聞き取れた。否、何かしら不思議な力を使つていたのかもし

れない。

月光を背に、一挺の銃を構えた少女が言った。

少女は、ケイスと同じ学校の制服を纏い、“銀色の銃”を構えていた。

「そこまでにしておきなさい」

距離はあつたが、少女の声はしつかりとケイス達の耳に届いた。

「ひはひへほ（痛い目を）…見ますよ？」

右の銃のスライドを口にくわえて、それを引く。カシン、と小気味よい音を響かせ、銃口を白い少女に向けた。

「狗め…」

「狗だから何だと言ひの？私の気が変わらないうちに失せなぞ…」直後、鋼の噛み合つ音。ほぼ瞬間移動に近い動きで斬りかかる少女。

「…引く氣は無さそうね」

「貴女の方こそ、御引取り願おうかしら？」

その斬撃を、エモノを交差させつつ受けとめる一挺拳銃の少女。ギリギリと、鋼が擦れる音が響く。

両者が弾け合うように跳躍する。好機とばかりに、一挺拳銃の少女は銃口を向けた。

「豆鉄砲なんて、距離をつめればツ！」

再度、超高速で切りかかる剣使い。今度は、銃をトンファーの要領で逆手に持ち替え、一挺で受ける。

「…豆鉄砲がどんなモノか解つても…そんな事が言えるかしら？」剣を受けた銃のグリップ裏。マガジンの底から青白い光がはなたれる。それは一瞬のうちに銃全体に走り、銃口に集まる

「ツ！？」

と、次の瞬間。その光は白い少女の剣へと”移つた”。まるで、化学反応を起こしたかのように光は狂暴になり、赤紫の光を放ちながら少女の身体を焼くために刃を伝い、走る。

閃光、炸裂、衝撃。

まるで、爆弾が爆発したようだつた。
ギリギリの所で、爆弾と化した剣を手放した少女は、一挺拳銃の少
女“大高サヤ”を射殺すように睨んだ。

視点「ケイസ」

「イリは…」

『硝子の牢獄』。そんな言葉が浮かんだ。それは見えるだけで、触れることは許されないからだつたと思う。

俺=僕は洋館の一室に立つていた。古ぼけた、汎えない部屋だ。見覚えは無い。初めて見る場所だ。間違いない。

室内を見渡す。

ソファー、テーブル、机、ランプ、椅子、本棚、蓄音機、譜面…隅に寄せられた楽器たち。多分、作曲家の部屋だつ。

……

と、蓄音機が勝手に動きだした。聴きなれない、重く、ゆつたりとしたメロディーが響く。

(…詩が無い?)

ところが事は『音楽^{クラシック}』だらう。唄の作曲ではなく、あくまで音楽家な訳だ。

俺>僕は蓄音機に近付いてみた。楽器とはまた別の、隅に置かれた棚にそれはある。

ゆつくつと回る黒い円盤。僕は手で回転を止め、円盤を手に執つた。

タイトル覧にはそう書かれていた。

ホワイトアウト
閃光

次の瞬間、俺く僕は別の“空間”に居た。
白い空間だ。

ただ、宙には沢山の黒い円盤（あの洋室にあった物、もしくは同種の物だろう）が浮いている。

目の前の一枚。さつき見た『抗つ者』だ。それに触れようと手を伸ばす

ブラックアウト
暗転

B l o o d * B e a t

ケイスはゆっくりと瞼を開けた。

「…おはよう」

傍らに座っていた少女。ルカは、瞳を潤ませながら、振り絞るよう

に呟いた。

人物紹介

はい。というワケで始まりました『Blood*Beat』です。OPも終わり、いよいよ本編突入です。そんなわけで簡単なキャラ紹介を。

達騎 京司

Act・Kの主人公。高校一年。

基本的に大人しく、口数は多くない。常識人。

戦闘スタイルは近接格闘型。射程は零～中。

紅葉 瑠華

両親のいない達騎兄弟の面倒を支えている紅葉夫妻の一人娘。ケイ

スの兄に想いをよせていた。

性格は前向き。行動力があり、思つた事を隠し切れないタイプ。顔にでる。

戦闘には参加しません。

大高 沙耶

クラスメイト。

戦闘スタイルはオールラウンド。長～中距離なら銃、近距離は得意の脚技と、射程に關係なく闘える。パワータイプではないため、一撃は軽い。

小嶋 大輔

脇役。友情ファイアーとかいう展開は無い。

達騎 党真

ケイスの兄。表向きは只のサラリーメン。それなりのエリートだが、

どこか抜けている。

Act・Kでの出番は無し。

剣使い（ソードダンサー）

最初の敵。ケイスにとつては兄の敵。

刀剣による接近戦を得意とする。カウンタータイプ。

？？？（？？？）

ケイスの前に顕れた少女。全てにおいて関わりをもつキーファクタ
ー。

黄昏時は『誰彼時』。怪異が最も近寄る時と知れ。

：今のところはこんな感じですね。

キャラはソコソコ増えていきます。

これにて第一回ブリーフィングを終了します。

それでは、Blood*Beat第一章『破月 hazuki』。

お楽しみください。

「懺悔なさい」

冷淡な少女の言霊は、銃声とともに響き、硝煙のよつに風にせりわ
れた。

第壹章『破月 hankei』

左腕が無くなる夢を見た。酷く鮮明な、『現実のよつな』夢…

「なあ？人の話を聞いてんのか？」

「…ん？…ああ」

「……っはあ～」

当てつけがましい溜息を吐きながら、級友のダイスケは

「重傷」

なんてぼやいている。

「何が重傷なのさ～」

パクパクと箸を休める事なく、ルカは俺たちの顔をキヨロキヨロと
見比べていた。

「あのだね、紅葉クン。かの者は病に蝕まれておるのだよ
と、得意げに話し始めるダイスケ。

「…ああ！“恋の病”だね！ハカセ」

それに便乗するルカ。

「…ほほう？好き勝手話を膨らますのは構わないけどな。それなりに面白いオチがないと、色々と大変な目に合つぞ？特に勉学面…」
やわつ…

「いや。そこまで怯え無くてもいいだろ？が…」

輪郭とか変わつてゐる。

「じゃあ何凶んでんだよーう…」

「よーう…」

「…あ…」

「よう！」

「YO！」

「…ん…」

「HEY！」

「YO！」

「…つだーっ…ひめせえよー…」

「…ツ…？」

あ、やべ。ちよつと感情的になりすぎたな…一人とも本気で黙りこくつてしまつたし。

「…別に…ホント大した事じゃねえから…」

「…なら…い…けど…なあ？」

「…うん」

居心地が急に悪くなつてしまつた。これ以上ここに居たといひで、飯を不味くしてしまつだけだな。…場所を移そつ。

「…わい。ちよつと便所行つてくわ」

「あ…ああ」

「ケイスきたな～い！」――いう時は“オテアライ”でしょ？」「だな…ワリイ」

「ういう時のルカは、ホント助かる。反省が短いといつかポジティブというか…たまにムカツクけど、今のタイミングならじつはとても外に出やすくなるからいいだろう。

Blood*Beat

校庭の隅には、大きめの桜の樹が植えられている。不思議とその樹の周りには、一年中緑が茂つていて、代わりに桜の樹には“命”が無かつた。

誰も調べないし、誰も疑問を抱かない。俺は学者じゃないけど、御偉いさん方が調べないんだから大した事ないんだろう。

まあ、『夏、涼しくて。冬、暖かい』場所だから、こうして晩秋の時期でも外で寝転がる事が出来るのだが。

「…はあ～」

まあ、『夢で見た事が気になつて惚けてました～』なんて言つてみる、

「さやははは！オメーは小学生かよ～」

…つて、ダイスケにからかわるのがオチだよな。うん、言わなくて正解だつたな。

「…はあ～」

にしても…

「……」

左腕は確かに在る。違和感も無い。ガキの頃にカッターで切った傷、余程深かつたのか、まだ痕が残つてゐるし。

「…気にし過ぎか?」

でも、中途半端に入り交じつた現実は…凄く後味が悪い。

買い物には行つた。間違いない。その記憶はルカにも確認したから大丈夫だ。

踏切前で休憩をとつて…

「…そこまで行つたら…普通に帰るわな。うん」

なんたつて家とは、目と鼻の先だしな。

家。自然に頭に浮かんだワードに、少し寂しい気持ちを感じた。今居る家は、自分の家じゃなくて“ルカの”家なんだから。兄さんが殺されて、独りになつて、ルカの家に居候して。

「…ハハ…」

乾いた笑いがもれた。別に、喪失感とかそんなんじゃなく、逆に、充実感から出るものだつたのかもしれない。

ポケットの中には、バタフライナイフが一つ。鞄の中には、ダーツが六本。すぐに使える形でしまわされている。

ナイフは、サバイバルキットの物。ダーツは、最近ダイスケと始めたばかりだ。思いつきり投げても、的の中に当たる位にはなつたし、

殺傷能力は充分だろう。

：復讐だ。

奪われた事に対して。奪いかえしてやるんだ！ヤツがあらわれた瞬間に：

出来るのか？

破裂いて：

破裂されて

ズタズタにして：

ズタズタにされて

コロスンダ！

コロサレルッ！

「…ツ！？」

高ぶる心とは裏腹に、俺の身体は、ガタガタと震えていた。

「やあ。君も“また”サボりかい？」

と、声をかけられて目が覚めた。どうやら五限目は始まってしまったらしい。校庭では、ジャージに着替えた生徒達が、だらだらと体育をやっている。

「…人聞きの悪いこと言わないでくださいよ。これだつて立派な体育の授業です。寝る子は育つって言つじやないですか」

くい。と、校庭の方を指差す。

「…ああ。なるほどね…でもあれ、君のクラスじやないでしょ?」「あ~、わかつちやいます?」

上半身を起こすと、その人は相変わらずクールに微笑み返してきた。座つてはいるものの、身長が高いことは明白だ。

「ゴウちゃん」、進学決まつたからつてサボりすきじやないですか

「ははは…その呼び方はよしてくれよ。まるで男子じやないか」「ゴウちゃん。もとい、桜井キヨウ先輩は、苦笑いしながら握り拳をチラつかせてきた。

「ア…サクラライ先輩。シャレになつてませんが?」「そりゃかい?」

ついでに“ゴウちゃん”とは、先輩の別名『轟掌の響』^{アカシヨウカヘキョウ}を、かつてに省略してみたものだ。どうしてそう呼ばれるようになったかは…多分、空手部と一部の生徒しか知らないだろつ。

「…何か悩んでたようだけ?」

話す話題もつきかけてきた時に、不意な質問をかけられた。

「……」

「……トーマさんの事か…」

「……半分正解、半分ハズレです」

「そうか。……もう半分は、聞かない方がいいのかい？」

「……先輩ほどの人なら、俺の考えていることくらい分かつてしまつんじやないですか？」

「……じゃあ、もしも私の予想が合つてるとするならば……」

そつ言つて、ゆつくりと立ち上がつた先輩は、正面まで寄つてきた。

「？」

すると、ポンと俺の肩に手を置いてから、溜め息を一つ吐ぐ。瞬間。

ドカツ！－

「～～ツ！？」

一瞬の出来事に、いまいち現状が理解できなかつた。背中から肺にかけてが、ものすごく痛い。

「利口ではないな」

真剣。いや、力ずくでも止めるという意志がこもつた眼差しに、息をする」とやえ忘れてしまつていた。

どうやら先輩は、座つていた俺の胸倉をつかんで、背後にあつた樹に突きつけたらしい。先輩の長い足で、容赦なく踏み込まれた一撃は、まさに“轟掌”。素人で、何の心得も無い俺は、ゆつくりと意識を遠ざけるしかなかつた。

「わるかつたね」
いやはや。とぼやきながら、先輩は軽く笑っている。陽が沈みかけ
ているのか、辺りはオレンジ色に染まっていた。

「…早まる事なんて無いさ」

遠くを見るように、そして、遠くに話しかけるように先輩は言った。
「トーマさんを知る人は、誰一人として彼の悪口を言わない。君は
その事を誇るだけでいいんだ。君が手を汚す事を、トーマさん自身
は望んでない筈だからね」

“君が”の部分が少し強調されていた事が、少しひつかかる。俺以外なら許されるという意味なんだろうか？いや…

「…兄さんなら俺以外の人でも、ソレを望まないと想いますよ？」

「…なら、どうして君は…」

少しだけ強い口調で聞き返してきた先輩に、自分自身の矛盾した感
覚に気付かされた。

一瞬言葉に詰まつたけど、少し考えて納得のいく答えが出た。

「俺は、俺にしかなれない…から」

そう、俺は兄さんじやない。

確かに、兄さんなら望まないだろう。復讐する事で何がが変わると
は思えないけど、でも…落ち着いてみると、復讐だけが動機とは思
えない自分がいた。

「…なんてね。ぶっちゃけ、自分でもよく分かつてないんです」

軽く笑つて見せたけど、先輩はすっと遠くを見たままだった。

黙つていた先輩は、しばらくして「そつか」と言い残すと、放課後
を告げるチャイムとともに立ち上がった。

「…よく考えた方がいい。…私が君に言えるのは、“いらぬ興味は
捨てろ”という事だけだ。…止めて、無駄だらうからね」

「…助かります」

軽く肩をすくめると、先輩はのんびりと去つていった。あとに残された俺は、しばらくぼんやりと夕陽を眺める事にした。どうせルカラ達が探しに来るだろうなんて思いながら、形見のリングを夕陽にかざす。鈍く反射する紅に、一瞬、目を細めた。

Blood*Beat

カアンカアンカアンカアン……

何度も、私はここに来ただろうか。そう思いながら、少女はぼんやりと、通り過ぎる電車を見下ろしていた。後ろには、履いていた靴が並べられ、その上には一通の封筒が置かれている。

外そそがと迷つていた眼鏡は、やつぱりかけておくことにした。

誰一人として通行人は居ない。線路をまたいだ橋には、近くの遮断機のアラームだけがむなしく響いている。丁度、大通りに面した所に地下通路が出来てからというもの、回り道にしかならなくなつたここは、有つて無いような扱いになつっていた。

錆だらけの手摺に手をかける。じつとりと、手が汗ばんでいるのがわかつた。

ドクン。と、心臓が鳴る。飛び降りるという行為に、足がすくんでしまう。終わらせたいという思いと、終わってしまう恐怖。矛盾が、心中をグチャグチャと音を立てて撞き回していくようだつた。

「……どうしたら……」

痛々しい少女の叫びは、しかし、誰の耳にも届かないまま、遮断機の音にかき消された。

そして太陽は沈み、夜が来る。

朝日とともに目覚める者がいるように、夜の帳に身を起こす者がいる事を忘れてはいけない。

一つの身体に芽生えたもう一つの心は、やつれつゝと、少女の魂を蝕んでいった。

達騎と別れたあと、私、桜井キョウは屋上に向かうこととした。

「……」

案の定、誰一人居ない塔屋階。手摺の陰だけが床面に模様を描いていた。

少しだけ風が強い氣がする。肩口まで伸びた髪が、ザアツという音とともになびいた。

「……寂しいな」

校庭を見下ろす。部活に励む生徒の影は無く、あるのは風に躍らされる木の葉ぐらいだつた。

通り魔による殺人事件が始まつてからというもの、この町では毎晩誰かが殺されている。警察も必死になつて警戒網を張つていて、だが、犯人はそれすら嘲笑うかのように犯行を繰り返していた。力ニバリズム（特殊な精神状態における人肉捕食等の事）による犯行ということ意外は何の手がかりも無く、凶器と思われる刃物すら見つかつてない。ただ、犯行時刻が日没以降、日の出未満であることから、こうして放課後の構内での活動は、生徒、教員ともに禁止されているのだ。

しばらく校庭を眺めていると、にぎやかな三人組（一人は引きずられている達騎だ）が、校門に向かつて歩いていった。

「……トーマさん……」

達騎党真。私の兄弟子に値する人だ。

は現れた。入門方法が分からなかつたのか、入つてきた早々「たのもおーう！」などと叫んだせいで道場破りに間違えられ、父に容赦なく打ちのめされていたのを覚えている。私は、その数日後に稽古を始めたばかりだったが、トーマさんは、そんな私に一撃も与えることが出来ないほど弱かつた。そしてそれは、最後まで変わらなかつた。

碎鬼流は空手に近い部分が多く、よく大会にも出場していた。もちろん、私やトーマさんも例外ではない。

ある日、小・中・高校生、一般とが出場する、大規模な大会での出来事だ。高校を卒業したばかりのトーマさんは、一般的の部で出場。上達してきたその腕なら一回戦突破は容易かに思われた。

そう、いつも通りの彼なら。

敷き詰められた畳の上に立つトーマさんは、まるで辺りが見えないようだつた。殺意に満ちた視線は、眼前の相手に向けられている。それに対して、相手の方は気持ち悪い笑みを浮かべながら、ゆっくりと帯を締めなおしていた。周囲の人間は、その些細な変化を氣にもしない。父は、気が付いてはいるものの、腕組みをしたまま黙り込んでいた。

開始の合図が出される。同時に

「

トーマさんが何かを呴いていた。

「ならんッ！！」

父が叫ぶが、彼の耳には届いていない。

「　　ッ！！」

物凄い勢いで相手の懷に飛び込む。あの頃の私にはそこまでしか見切れなかつたが、ただ、鼓膜が割れるかと思えるほどの轟音だけは、今でも鮮明に思い出せる。

対戦相手は重症。トーマさんは、以降の大会の出場停止。更には父に破門を言い渡された。「惜しい存在だった」と、父が何度もそう言つていたのを覚えている。

後に分かつたことだが、あのとき対戦相手の男は、ケイスを人質にとつてトーマさんを脅していたらしい。試合開始直前で、トーマさんの協力者（女性だったと聞いている）に助けられたようで、それを知った彼が、その男に容赦無い一撃を喰らわせたと言うのが、事の全貌だ。

「…手を抜いていたんですね」

私は道場を去ろうとするトーマさんを呼び止めた。今まで手合せをしてきて、トーマさんは一度もあの技を出してこなかつたことが、私に対して本気を出していくに思えて悔しかつたからだ。年下だから、女だからという理由で手を抜いたのであれば、きっと私はこの人を殴り飛ばしたに違いない。

「手なんか抜いてないよ？」

苦笑いを浮かべたその顔は、明らかに嘘をついている顔だった。

「…キヨウちゃんこそ、本気じゃなかつたでしょ？」

すつと細めた目トーマさんは、冷笑を浮かべながら私に言った。

「ふ、ふざけるな…」

精一杯否定した。私はいつも本気だつたと。手を抜いていたのはあなただつたと。

「『年上が相手だし、負けてもいいや』…かな？」

僕と戦うとき、君はそんな風に考えていたんじゃないの？と、目が語っていた。

「ツ…？」

「その低度つて事だよ。君が戦う理由は

「…ちが…それは…」

言葉が詰まる。図星を突かれたからだ。言い返せない事が苛立ちを割り増しさせていく。その感情はどこに向けられるわけでもなく、ただただ涙として頬をつたつていった。ぼやけていく視界の中で、トーマさんはきびすを返した。

「本気じやない人間に、僕は本気になれない」

「……」

私が戦う理由なんてのは、一人っ子で、あとを継ぐ人が居なかつたから。親に薦められたから。いずれにしたって、私自身の意志が無いことは分かる。仕方ない、そう言い聞かせて今まで稽古をしていたが、この時ばかりはそうはいかなかつた。

「……じゃあ！貴方はどうなんですか！？」

これは負け惜しみだ。この人が戦う理由は明白で、単純で、なにより強く、温かかつた。そう…

「たつた一人の家族を守る為」

ああ、敵わないな。と、ようやく理解した瞬間だつた。

「……う……つ……く……うあああああああつ！」

急に泣き出した私に、あの人はわたわたとうろたえていたが、慰めようと何かを口にしていたが、今ではよく思い出せない。なぜ、あの人は弟を守るために力を望んだのか。それだけは今でもわからなかつた。

Blood*Beat

グッと、握った拳に目を落とす。

「……私は本気になれるんでしょうか？」

トーマさんに会うたびに、私はそう聞いていた。あの人はいつも「大丈夫」とだけ言つて、自分より身長の高い私の頭をなでてくれた。が、そうやってやさしく笑つてくれる人はもういない。

あの頃からずつと、私は本気になれる理由を探している。あの人に負けない、立派な理由を見つけない限り、私のプライドが許してはくれないだろうから。

どのくらい物思いに更けていただろう。完全に日は沈み、月が昇つ

ていた。

「…帰るわ」

立ち上がりながら、スカートに付いた埃をはらつ。空の鞄を持って、ウンと背を伸ばした。

ドクン。

少しだけ強い風が吹いた。肩口まで伸びた髪が、ザアつといつ音とともにになびく。

ドクン。

振り向くべきか、一瞬だけ戸惑つた。

ドクン。

振り向かなければよかつたと、少しだけ後悔した。

ドクン。

月明かりを背にした脅威が、二タリ、と、不気味に笑つた。

屋上に降る月明かりは雲に遮られる」となく、ただただ私達を冷たく照らしていた。

Blood*Beat

「ほんっつとにッ！ 何考えてるのよ！ 確かにケイスは私達よ
り勉強できるから、一時間や二時間や三時間くらいサボっても何の
問題も無いかもしけないけど、親にまで心配かけさせないでよ！」
そして俺の脚を片方ずつ脇に挟んで、ガミガミブツブツと文句を言

校庭の砂が、いい感じに凶悪なサンドペーパーのようで、M A J I D E デンジャラス。いや、顔を横に向ければ被害を抑えられるのだが、今になつて先輩の一撃が効いてきたらしい。面白いくらいに力が入らないのだ。

「お!? 校門が閉められるぜ!
ダッシュだ! ルカっち!」
「応ッ!」

ダイスケが指差す方を見て、ルカは俺の脚を抱えたまま走り出した。二コ二コと微笑ましい光景でも眺めているかのように、俺達が出て行くのを見送るうつとする先生。「閉めちゃうよ」と言いながら、

門扉をガラガラと動かしている。

「ガツ！ ハアツ！ ちょツ！ おまツ！！」

ベチン、ベチンと。ルカが走るたびに俺は上半身を強打する。グラウンドには七十センチ間隔で、見事な『ゾ』の字が刻まれていった。

「マジッ！ やめ！ あ。 パン 白 ツ！ グフウ！！」

ガコン！と、殺意の込められたカカトは、とても自然な動きにのつて俺の顔面に叩き込まれた。ちょっと、洒落になつてないな。なんて思いながら、またまた俺は氣絶してしまうのであつた。

B100d* Beat

「最ツツツ低だよね！！」

夕飯を食べ終わった後恒例の勉強タイム。といつても、俺が教えるルカが訊くだけの時間なのだが。ルカはどうも機嫌が悪いらしい。先ほどから「最低」の連呼ばかりだ。

「ああ。バリツボリツ（お。今年の新作。ポテチ、『すてぼてちん』は当たりだな。あとで買い溜めておこづ。）…最低だなあ…」

「もうホントマジ最低最低最低最低…」

ノートに走るシャーペンは、一文字書いては折れ、もう一文字書いては折れを繰り返している。

「…あのは？ ルカ。俺も言いたいことはあるぞ？」

「なによつ！？」

キツ！と俺をにらみつけるルカ。驚愕したポテチをバリバリと貪る様子は、とても絵になつた。

「…まあおちつけ。いいか？ 今。俺には“此処に在るべき物”が無い。…解るか？」

じつとルカの目を見て話す。子供をしつけるように、ゆつくつ、はつきりと問いかけた。

「…わかんない」

ムツとしたまま、そつけなく答えるルカ。チョイツとテーブルを指差す。

「？」

「教科書、ノート、筆記用具、ポテチ、コップ」

「…うん」

で？ と、ルカは目で聞き返してきた。

「教科書が“一冊”。ノートが“一冊”。筆記用具が“一人分”」
「！」

「…あつ…」

おう。やつと解ったか。普通は帰つてきた時点で気付くものなんだが、大目に見てや

「ジュース無くなつた」

「…れるかああツ…！」

ズガアーン！と、豪快な音を立てて、テーブルに頭をたたきつける俺。「なにやつてんの？」と、小首を傾げるルカ。

「違うだろツ！？ 勉強道具一式だろ！？ 俺のツ…！」

ああ、なるほど。みたいな顔をして、ルカはリビングに向かおうとする。

「はあ…きつと校庭に落としたんだよ…“どつか”的“誰か”が、氣絶させるようなマネするから…」

ドツと疲れが押し寄せてきた。

ふと、少し冷静になる。…鞄の中に入っている、針が剥き出しのダメツとか、見つかつたらヤバいかもしれない。

「…とつてくる…」

「…いつてら…」

のそのそと立上る俺を、ひらひらと手を振り見送る雌狐。くそう、後でなかしちやる。

「あ
日没後の外出禁止令をルカが思い出したのは、それから三十分後だ
った。

「コンバンワ、桜井キヨウ。…今夜は、」

アナタノバンヨ。

カリカリと、少女はその手に持った物で床面を引っ搔きながら歩き出した。屋上というキャンパスに筆をおとして、これから始まる『舞踏会』に思いを馳せ、白いドレスを風に靡かせる。月明かりは、まだ、冷たい。

「……」

はたして、その言葉の意味を理解できるほどの機能を、私の頭はしていたどうか？恐らく、否。目の前に在る“怪異”の、あまりに浮世離れした可憐さに見惚れてしまっていたのだから。

ぐすくすくすくす……

落ち着け。現状を理解しろ。置かれた状況を噛み砕いて理解するんだ。少しずつ加速していく思考回路の中、少女の笑い声だけがいやに鮮明な響きを残していた。

じつと相手を見据える。殺意があるのは間違いないだろう。ナガモノは、間違いなく“殺ス”道具だ。ならば次に、相手が私を狙う理由を模索しよう。……まあ、勿論の事だがあるわけがない。

「ツ！！」

少女の影が消える。目に見えないほどの高速移動によるものなのか、瞬時にして視界から消えただけなのか。どちらにしろこうなつてしまつた以上、視界での判断は迷いを産む要因にしかならない。私は目を瞑り、耳を澄ました。否、耳だけではない。肌を撫でる風、晩秋の乾いた空氣の味、月夜の匂い。残る四感に集中する。そして…

ヒュンー！

風が止むのと同時に、私は右足を軸にしてコンパスのよじた重心を移動する。刹那、風を切る音と共に何かが太股辺りをかすめた。

「…それ。何処の流派だい？」

「…チツ」

物凄く不愉快な物でも見るよう舌打ちをすると、タシタシタシと軽やかに飛び退く少女。…ふむ、まあいいさ。

「悪いが、大人しくやられるつもりは無いのでね。少々抵抗させてもらひうよ？」

右の掌は肩の高さまで上げ、突き出す。左は拳を作り脇を締め、構える。進行方向より後ろにある左足には、常にバネを効かせておく。重心は常に垂直。眼は、相手以外を認識しない。今度は隙無く、五感すべてを集中させよう。

その構える様子を認めると、彼女は口が裂けているかのように笑みを浮かべた。

「…ひとつ、訊いておく」

「……」

完璧に黙りこんでいたが、かかつて来る様子が無いので続ける。

「本気なんだろうね」

スッと眼を細める。感情を込めず、なるべく淡白に問いかけた。と、少女が鼻で笑うのと同時に

「…言つたでしょ？ 今夜は、あなたの、番」

触れ合う様にピタリと背後に回りこまれる。耳元で囁かれたのは非常に不愉快だったが、情に流されはいけない！

「シツ…！」

振り向きたまに裏拳を放つ。案の定避けられたが、追撃はしない。

ヒュンー！

縦に振り下ろされた剣の軌道を読み、回避。相手の反応速度が上な以上、うかつにカウンターは狙えない。が、私が今まで培つてきた勘なら“見切る”事ぐらいはできる。

（まあ、身体がついてくるかは別問題なんだけじね…）

紙一重で、かわす、かわす、かわす。その度に皮膚が傷付けられていぐが、致命傷に至るものは無い。私が追い詰められていくのを面白がるよう、一振り一振りが大きくなつていぐ。まだ、まだ、もつと、致命的なまでに…

「なあに！？ つまらないじゃないのッ！… 手も足も出ない！？」

「……」

小さく息を吸い、止める。集中。と、その人の会話が脳裏をよぎつた。

「トーマさん。私は、本気になれるんでしょうか？」

私はいつものように尋ねる。

大丈夫。きっとなれるぞ…！

「霸ツーーー！」

ブンツーーと、致命的に隙だらけになつた一撃を、私は見逃さない。軽く踏み込み、左に構えた拳を鳩尾みぞおちへと叩き込む！

「ぐッ！？」

よろけた瞬間を、先ほどより深く踏み込み、脇腹に向けて右の掌で押し込むように掌底。

「勢ツーーー！」

グラついて背を丸めたまま、一步一歩と後ずさる相手に対し、トドメの踵落しを叩き…

「ツーーー？」

突如として襲つてきた悪寒に、空気の変化を感じ取る。この機を逃したら、私に勝ち目がなくなる可能性もあつたが、思わず飛び退いてしまつた今となつてはもう遅い。

乾いた風と、夜の帳が辺りを包み込む。

トス。

不意に、何かが落ちてきた。

「？」

トス、トス。

一本、一本と、刃だけの剣が少女の周り、私が居た場所に落ちる。

「…落ちて、きた？」

物が落ちるということは、万有引力にのつとり、それは“上”になければならない。

ゆつくりと、夜空を見上げる。

「……」

満天の星空。月は、上手い具合に雲つ空の隙間から顔を覗かせている。

「…ツ！？」

…雲よりも低い星たちは、綺羅綺羅と月光を反射していた。

月明かりは、まだ、冷たい。

「……」

数は、大体五十～六十。大きさは、落ちてきた三つを見る限り統一されているように思える。

グニヤリ。と、天を仰ぐように身体を仰け反らせる少女。両手は力なく垂れ下がっていた。呆けるように開いた口は、だらしなく涎を垂れ流し、眼は大きく見開かれ、じっと上を見つめている。

微動だにしない相手に、攻め入ろうかと迷つたが、隙があるようにも思えない。ましてや、この心臓を掴まれているような感覚は、けつして戦いの流れが自分の物でない事を嫌でも実感させた。

ギッ！！

距離を取ろうかと一歩動いた瞬間だつた。彼女の眼球だけが動き、私を捉える。

「シネヨ」

刹那、刃が一振り落とされた。重力に任せたまま落ちてきたそれを避けるのは簡単だつた。

一振りの刃。動きを封じるかのように、今度は進行方向へ落とされる。

「くつ！」

止まつてはいけない。常に動き続ける事で、自分の“生き延びる確率”を上げる。進路を閉ざされたら創るのみ。私は相手と一定の距離を保つように走つた。

四振りの刃。今度は四方を囲むように落とされる。ペースが少し速まつたように思えたが、まだ大丈夫だ。隙間を縫うように退け……

「ツー？」

突如、今度は八振りの刃が降り注ぐ。進路を完全に塞ぐように突き

立てられた。

次に来るとすれば十六本だらうか。どちらにしろ、逃げ道は無い。

「なりばッ！！」

腰を落とし、重心を低く構える。脇を締め、掌を作り、自分の持てる“最速”に備える。深く息を吐き、止める。迫る刃に意識を集中。狙うのは剣の“腹”的部分！――

「嗚オオオオオオオッ！――」

落ちてくる全ての刃の“腹”、平たい部分に向けて掌底を叩き込む。いや、落ちていく方向を逸らせるだけでいい。滝を搔き分けるように、いなす、いなす、いなす。

十一、十二、十三、十四、十五、十六。十七、十八…

（止まらないッ！？）

十六を過ぎても止まない。二十四、二十五、二十六…。もはや氣力の勝負だった。意識が霞んでしまいそうになるのを何度もとなく堪える。はじいた刃が、既に落ちていた刃に弾かれ、私の足を傷付けた。

「つあッ！」

思わず膝を折りそうになるが、す寸での所で踏みとどまる。手の動きは止めない。

「…畜生ッ！ 畜生ッ畜生ッ！…」

目から涙が溢れる。視界がぼやけていくが、それでも動きは止めない。弾かれた刃が、一つ二つと足を傷付ける。限界が、近い。

「うああああああああああああああああああああッ！――！」

左腕を思い切り振り上げる。思ったよりも切れ味の悪い刃は、食い込んだところで貫くことは無かつた。腕に七本、掌に一本。足にはそれぞれ三本ずつ。それで最後だった。

「…はあ、はあ。…は…あ…」

まだ生きていると、実感した瞬間に左腕は力を失った。無傷の右手で、突き立てられた刃を抜く。

「…クッ！ ああつ！…」

一本抜く毎に走る激痛は、意識を遠退かせたり、急に覚めさせたり

を繰り返した。

「……」

全て抜き終わり、倒れそうになりながら、刃に埋め尽くされた屋上を歩く。

（まだ、私には出来る事があるのだろうか？）

制服をちぎり、包帯の代わりにする。一番ひどい左腕は、ミイラのようになってしまい少し笑えた。

（…右腕は無傷。左は無理として、両足は“全力で”一度、耐えられるかつてところか…）

今の状況を打破する確率を探す。一撃で、そして必殺の威力を持つ…

「！！」

脳裏に浮かぶ光景。耳に残る轟音。高速の一撃。必殺の威力。

「…あつた」

そう、私は知っている。その技を。既に父からは伝授されていたが、あの人には到底及ばなかつた故に一度も放たなかつた“必殺技”を…

ゆっくりと立ち上がる。

一歩一歩、確実に歩く。

刃の林を抜け、相手と対峙する。

「」

相変わらず私を睨みつけている。上空には何も無い。やるなら今をおいてほかに無いだろ？

「…これで終わらせるよ…」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。直立不動、取る構えは“無”。

碎鬼流 絶掌

全身を大気に溶かす。一帯に神経を延ばし、相手すら絡み取る。距離は五メートル、射程距離一杯といったところだろう。

思い切り地を蹴る。風を創り、風に乗り、音よりも速く。

「絶・掌ツ！-！-！」

右の掌を螺旋ネジり、上半身をあいつたけ捻る。狙つのは“相手を貫いて三メートル”ツ！-

「轟・雷・閃ツ！-！」

天を貫く雷の”とく、その一撃は放たれた。落雷にも似たその響きをかわきりに、ポツリポツリと雨が降る。月明かりは閉ざされ、在るのは只、次第に強まる雨音だけだった。

私は“また”本気になれていなかつたのだろうか？　武器を手にした相手を前にして、またくだらない言い訳を自分に言い聞かせていたのだろうか？　この結果を見てもあの人は、また優しく笑ってくれるのだろうか？　「精一杯やつた」と言えば、頭を撫でてくれるのだろうか…

…私は、本気になれましたか？

…教えてください、トーマさん…

Blood*Beat

「よつと…」

学校の正門を乗り越える。裏口から行こうかとも迷つたけど、どうせ誰もいないなら近い方がいい。ふと、着地したときに自分の影がある事に気付く。

「…ああ」

満月だった。曇つていぐ空の中、月の周りだけが晴れている。遮るものの無い月光は、昼の明るさよりも清らかな印象を受けた。綺麗だと思った反面、少し気分が悪くなつた気がした。…何か、大切な事を忘れてしまつてている気がする。

「何が…あつた？」

どんどん時間をさかのぼつしていく。夜中に出かけた覚えは、ここ最近に限つては無い。なら、気のせいだろうか？　いや、そんな筈は…

「…雲行きが怪しいな」

ふと見上げると、少しだけ雲が厚くなっていた。あと五分もすれば降り始めてしまうだろう。いつたん考えるのを止め、俺は目的の鞄を探すために、校庭へ向かって歩き出した。

「とりあえず、用を済ませるか」

校庭に残った自分の上半身の跡をたどる。見れば見るほど間抜けなそれは、我が人生のうちで三本指くらいに入るできだつた。

（誰かに見られたら恥ずかしくて死ねるな…）

顔の部分だけを蹴り、自分だと判明しないようにする。校庭の真ん中辺りに来たところだった。

「お？」

あつた。丁度、ルカ達が走り始めた辺りなのか、引き摺っていた跡がYの字に切り替わっているさかいめだつた。拾い上げると、見事に砂埃にまみれている。…中身は大丈夫だろうか…

ガゴオオオンツ！…！…！

「～ツ！？ なんだツ！？」

鞄を開けようとした矢先のことだつた。大気が震えるかのような轟音。まるで、雷が至近距離に落ちたみたいだつた。ポツリポツリと雨粒が降り始める。俺は何が起こつたのか分からず辺りを見渡した。視界を遮るような閃光が無いあたり、雷が落ちていないのは確かだつた。でも、あの音はけつして穏やかなものではない事は嫌でも分かる。

（…」の音、昔も聞いたことがあるぞ…？）

そう、あれは確か“空手の大会の日”。兄さんの試合の時だ。

「畜生ツ！ 何だつてんだよ！」

辺りをくまなく見渡す。と、屋上の方に粉塵が立ち込めているのが見えた。俺は迷うことなく、校舎に忍び込む事にした。

その一撃は、私の全身全霊を賭けたものだった。今まで一度も納得のいくものが放てなかつたが、今回のは自己最高の出来だった。

「…っあ」

力なく、膝が折れた。右腕は一つ多く関節を作り、ただ肩からぶら下がつている。もう、一步も動けなかつた。血が流れ出ているのに気付く。体温が下がつているのか、肌に当たる雨すらも暖かく感じた。

少女と私の間には、まるで境界線を引くように“刃の壁”が出来ていた。もちろん、私はそれすらも貫くつもりで絶掌を放つたのだが、所詮は“対人”的技。化け物にかなう道理が無かつた。

（…自惚れすぎてたなあ…）

溜息と共に、少しの血と、笑いがもれた。そして、硝子が割れるような音をたてて、その壁は崩れていく。

「…」

彼女は、まだ私を睨みつけているのだろうか。俯いたままの姿勢では、それすら確認できなかつた。制服に、雨と血液がしみ込んで重くなつていいく。その重さすら支えられないほど、私は弱つていたのだろう。もう…意識すら…たもて…

はこられないほどに嫌な予感がした。

「兄さんッ！！」

思わずそんな事を口走ってしまったが、かまつていられる状況でないことがわかつた。

「…た、つき…」

血だらけで横たわる桜井先輩。そして…

「…うあ…」

自分で間抜けだと思える声を出してしまう。

その少女を見た瞬間、心臓が破裂するかと思った。“昨日の夜の記憶”が蘇つてくる。

切断された左腕。むせ返るような血の臭い。今思い返せば、吐き気すら感じる衝動、殺意、負の感情。

そして…

恐怖。

「うあアあ亞あ^アッ！！」

ボコッ。と音をたて、左腕が“沸騰”していくのが分かった。雨が当たる度にそれを蒸発させ、赤黒く変色した左腕は、禍々しい“バケモノの腕”と化していた。

降り始めた雨は、容赦なくその勢いを増していく。もう、後戻りできないところまで来てしまったのかもしれない。そう、思わざるをえなかつた。

そこで夢から覚めた。

朝、起きると兄さんが珍しく早起きをしていて、朝食が用意されていて、遅くまでゲームをしていた俺はソファーをベッドにして横になっていた。夜中に帰った兄さんがかけてくれたと思われる毛布が暖かい。

「おらー。おきれー」

テキパキガシャンと食器を並べながら、兄さんは俺を起^{ハシ}さうと話しかけていた。もう五分、なんて使い古された返答をしようとも開く。

「

声が出ない。

「どうした？ ケイス」

いつの間にか、兄さんは俺を見下ろすように立っていた。

「 ッ！？」

ソファーから起き上がるうとして、気が付く。俺は、いつの間にか兄さんの前で跪いていたのだ。

「僕は“オキロ”と言っているんだ」

「つ！」

思わず息を呑んだ。その時の兄さんの声は、本気で怒っている時の声だった。瞬間、ガラガラと音をたてて背景が崩れしていく。

「逃げるな」

わしづと頭を掴まれて、ぐしゃぐしゃと撫でられる。俯いていた顔を上げ、俺は兄さんの顔を見た。と、今度は優しく微笑んで、しかし力強くこういった。

「お前には“助けられる”力がある」

兄さんの言っていることが分からぬ。赤黒く染まつた世界で、同じような色に染まつた左腕が脈打つ。

「大丈夫」

さつぱり分からぬ！！ 何を根拠に大丈夫なんだよつ！！ 僕に
ある力つて、この“化け物の手”のことかよ！！ 笑つてないで答
えてくれよ！！ そんなふうに声にならない声で叫ぶが、兄さんの
気配はだんだんと遠ざかっていくだけだつた。

「お前は、俺の弟だ」

最後に、それだけ言い残して、兄さんは消えた。そして、これが夢
であることによく気付く。遠くで、雨の音が聞こえた。

B100d* Beat

耳障りな雨の音。覚醒していく意識。夢は、ほんの一瞬の出来事だ
つたらしい。まだ、服は濡れきつていらない。

「……」

左腕に目を落とす。直視するだけでぶり返してくる吐き氣は、まだ
何とか耐えられる程度だつた。

俺は、何処で何を間違えたんだろう。頃垂れたまま、後悔にも似た
感情が押し寄せてくる。この場から逃げて、全てを見なかつたこと
にして、いつもどおりの生活に戻ろうと、そんな考えが過ぎつた時
だ。

「逃げるな」

「……え？」

豪雨のなか、まだあどけなさの残るその声はハツキリと耳に届いた。
小さな手が、俺の頭に置かれる。

「大丈夫」

ゆつくりと、頭を上げる。

「オマエは、トーマの弟だ」

そう言って、まだ中学生にもなつていないうな少女が笑い掛けた。

どこかで見たような、そんな気がした。

「キミ…は」

そうだ、確かに昨日、俺はこの子を追いかけたんだ。それで、その後、

俺は腕を…

「……」

立て、と。少女は俺を促した。別にダメージを受けていたわけでもない俺は、ようやく落ち着いて現状を見極めるほどの余裕を手に入れたらしい。

「…先輩ツ…！」

駆け寄ろうと踏み出しが、物凄い力で服を掴まれてしまう。

「何なんだ！ 放してくれ！」

ぐいっと引っ張りかえすが、ビクともしない。むすっとして、少女は俺を睨んだままだつた。

「落ち着け、無駄死にされてはこちらの面目が立たん

「なつ！？」

「何だこのませた態度は！？」拳句にあきれた顔でこっちを見上げ

ている。

「だいたい、勝算も無い、戦う術も知らない、状況もわからないでどうする？」

「…う」

「ただ突っ込むことが悪いわけではないが、今は得策とは言えない

な

放した手を組み、自分の言葉にうんうんと頷いている。

「じゃあどうしようと？」というか、そもそもキミは

誰？ と、聞き返そうとする俺を、少女は得意げに鼻を鳴らし一刺し指で制した。

「我を受け入れよ

「断る」

即答した。そして先輩を助けるべく、俺は今度こそ駆け出す。

「おま、ちょ、待たんか！！」

「うおおおおおおおッ！！」

気が付けば、今までに先輩の身体を貫こうと、何本かの大剣が降つて来ていた。駆けると同時に、昨日の夜のことを思い出す。襲つて来る恐怖より、今は助けたい気持ちが勝っていた。

「やあめえ… 口オオオオオオッ…！」

左腕を振りかぶり、そのまま殴るよじに突き出す。同時に、風を切るような音。それも一つではなく、幾重にも重なつた斬撃の「」とき凄まじさを持つていた。

「いけえッ…！」

腕を覆つように発生した斬撃の塊は、降り注ぐ剣の悉くを粉碎する。一掃した後、バチンと、その嵐を発生させた“三つの爪”は、手首の辺りに収まった。

「先輩ッ…！」

一瞬で抱きかかえ、その場から離れる。高温の左腕に触れないように、右肩に担いで運ぶ。体制に躊躇じまどいがあつたが、今は気にしていられないと判断した。

「…っし！ 救出成功だ！ ザマミロ…」

屋上の入り口まで走りきる。つまらなそうに壁へ寄りかかっている少女に、俺は得意げに悪態をついた。

「…で？ どうするのだ？」

「？」

意味がわからない。どうする？ 何を？ 先輩のことか？ いや、そんな口ぶりではない。ちょいちょいと、人差し指で俺の背後を指差す。

「？……ッ！」

振り向いた先には、両手に自身の身長の倍はあるうかという大剣を持つた殺人鬼がいた。早歩きで、不気味な笑みを浮かべるその様子は、おぞましさしか感じなかつた。

「そら。また突撃するがいいさ。今度は相手もお前しか目に入つていいようだぞ？ さっきの技でもやってみるがいい。…まあ、す

べて見切られて、お前の首が飛ぶだけだがな

「くつ…」

出来ることならそうしていた。さつきは無我夢中で出来ただけの“ラツキーパンチ”だというのは重々承知だ。現に、さつきの爪は動かそうとしても何の反応も示してくれない。

「ほれ。どしだどした?」

物凄くムカついた。ぶん殴つて黙らせた方がいいかと迷つた。…でも、選択肢は残念なことに一つしかない。

「……んだ」

「?」

ワザとらしく小首をかしげる少女。確實に聞こえていた筈だが、俺はもう一度、大きく息を吸つて叫んだ。

「どうすればいいんだッ！？」

「いっ…するのさッ…！」

俺の“右腕”を掴み、少女は自らの鳩尾みぞおちに押し付けた。ズブリ、とあまり気持ちの良くない感触が腕全体を包む。

「ば！ 何してんだ！」

視界を遮る、眩い閃光。右腕に溶けてゆく少女。中指にはめられた兄さんの形見の指輪が、燃えるように熱い。

「知つているか?」

頭の中に少女の声が響く。

「これは、トーマが手にした“守る力”…」

未来を拓く銀の鍵アガート・ラーム！！！

閃光が、瞬時に収まる。いや。右の掌に吸い込まれたのだ。

「アガート…ラーム」

人工物のような、機械的なフォルム。何の装飾も無いようなガントレットは、黄緑色の小さな光を表面に走らせていた。

いつの間にか雨は止み、また月明かりが顔を出す。

月明かりは、少し暖かかった。

聞こえるな？

少女の声が頭に響く。

「え？ あ、ああ」

「くんと頷くが、あからさまな溜息で返された。

…避けろ

「へ？」

瞬間、俺の首めがけて放たれる斬撃。寸でのところで回避するが、斬り返しの一撃目を避ける自信は無い！

任せろ！！

ガキンッ！ と、鋼と鋼がぶつかる。俺の意思とは関係なく動いた右腕は、一本を腕部についたシールドで、もう一本は人差し指と中指で白刃取りをして防いだ。

（いつの間に三撃目を放ったんだ！？）

既に相手の動きに翻弄ほんろうされつづつあつた俺は、早くも腰が抜けてしまいそうだった。それに気がついたのか、アガートラーム（ということにしておく）は二本の剣を振り払い相手もろとも投げ飛ばした。

しつかりせんか！ 腰など抜かしあつて

「す、すんません…」

右腕に謝る俺。ゆっくりと立ち上がるが、相手の方はもうこちらに向かって歩き出していた。

「…で。どうするんだ？」

相手から田を離さずに問い合わせる。ボクシング選手みたいに構えてみるものの、ステップを踏むだけで疲れがおそってきた。

汝なれ、もしや格闘技の心得が無いのか？

御名答。自慢じゃないが、個人競技は卓球とバドミントンしかやつたことが無い。沈黙する俺にまた溜息をついて、アガートラームは呟いた。

まったく。
お前らは本当に兄弟なのだな……

ポツリと、少し寂しい響きを感じたが、それも一瞬のことだった。
仕方ない。今からオマエに武術を叩き込む！

仕方ない。今からオマエに武術を叩き込む！

「ながら回避する俺。何度も転びそうになるが、その度に襲ってくる刃と、切らせまいと引っ張る右手のおかげで何とか生き延びている。
「なんで」

昨日みたいな反応が出来なくなっているんだ？」と思つた。するとアガートラームがそんな事もわからないのか？ ときりだしてき

簡単なことだ。我を受け入れたように、
“それ”も受け入れれば
よい

受け入れる。俺はその言葉に、物凄い躊躇いがあつた。最初のとき
に感じた異物感、禍々しく蠢く赤と黒。傷口から侵食していくよつ
な感触。

思い出しただけで吐き気が襲つてきた。同時に、昨日感じた力への愉悦感。ドクンと、今度は左腕が脈打つ。

呑まれてしまふやうだ。

その声で再び我に返る。まつたく異なるタイミングで脈打つ三つの鼓動は、それだけでもあまり心地いいものではなかつた。

……おじでには、おじの左腕に無い

と、襟首を右へ左へ引っ張りながら語りかけてきた。何を言つてゐるんだ? と聞き返そつとしたが、黙つて聞かされてしまひ。

まわ、田を闊じろ

1

言われるままに田を閉じる。動きは引っ張られるままに、バランスだけは崩さなかつた。

では、お前の腕は“ある”

「？」

俺はワケがわからなかつたが、言われたとおり両手がある自分を想像する。

よし。皿を開けろ

「……あ

と、間抜けな声を上げてしまつ。といつのも、左腕が“戻つて”いる“のだ。

「すうい！ 治つてゐ！」

……では、今度はもう一度、落ち着いてさつきの腕を思い浮かべろ。ただし、“自分の腕がある事”を忘れるな

「……よくわからぬぞ？」

むう……では、自分の腕を変形せらる。と考えてみよ
あまり乗り気ではないが、しじつがない。“自分の腕”を“さつきの形”に変える。

「「ドクンッ！」「

重なる二つの鼓動。侵食される、いや。侵食するのは“俺の”神経。その隅々まで、俺の支配下にする。襲つてくる衝動は無い。恐れもない。なぜなら、その腕はもう

「俺の腕だッ！…」

高速で振り下ろされる刃を碎く。身の危険を察知したのか、相手は屋上の端まで跳躍した。それと同時に俺を取り囲むように顕現した剣は、霧散させた血液を操り超高速で叩きつけることで薙ぎ払う…

まつたく…手のかかる奴だな

これでやつと本題に入る。と、そういうつてアガートラームは動きを俺に預けた。

避けながらでよい、落ち着いて最後まで聞くのだぞ？

言い回しに少々不安を抱いたが、とりあえず了承した。

では、あの娘を食え

なんかもつ、色々とぶつ飛んだ発言だ。驚きのあまり反応が遅れる。右足と片を刃がかすめていった。

「なつ！？ ど、どうこう意味だッ！？」

どうせこいつも。一般には口から入れ、胃袋へ落とし込み、各消化器官を経て、養分を体内に蓄積するという意味だ。……汝、何か良からぬことを想像したな？

「……思春期だからな」

と、ある程度距離をおくと攻撃は止んだ。改めてアガートラームに質問する。

「で、あの殺人鬼をどうやって食うんだ？」

あ、いやいや。そっちではなくてあっちだ

スッと勝手に右腕がある方向を指差す。そして、その方向にいたのは

「せ、先輩を！？」

もう意識が無いのか、ぐつたりと壁に寄りかかってたまま微動だにしない。生きていることは確認したが、それでも危険な状況なのは変わらない。

「馬鹿言つな…… ただでさえ危険なのに、^{おどこ}貶めてどうする！？」
だから最後まで聞けと言うところが！

顔面をつままれる、といつかアイアンクロウだつた。

“食う”と言つのは少し大袈裟だつたな。血液を、少しでよいから飲んでみる

だつたら最初からそつと食つてほしかつたが、曰く“食つた方が”効果があるらしい。

「つたく。何の効果だよ」

なあに。騙されたと思って、ほれ、ほれ

ヌチャ…といやな感触がしたが、構わず右手は俺の口に運ぼうとする。先輩に小さい声で謝つた後、意を決して飲み込む。

「ク…ン。

「 ッ！！」

体中の血が滾^{たぎ}る。力とは違^う、意志の強さが満ちていぐ！

「うあああああああああああああッ！！！」

流れ込んでくる先輩の記憶。いや、思考そのものが俺と同一化していく感覚。構え、受身、そして奥儀でさえも、俺の物になつっていく。

“先輩が体得した全て”を一瞬で俺の物にする。

（……本当に…ゴメンナサイ…）

そうだ、これほどの強さに至るまで、先輩は血の滲むような努力をしていたんだ。その記憶ですら、俺は共有してしまつた。それはとてもない無禮で、許されるような事ではないと思つた。だから謝る。そして…

「…ありがとうございます…」

横たわる先輩は、相変わらず苦しそうにしていて。俺は一つ礼をして、もう一度相手に向き直つた。

さあ！ 最後の仕上げと行こうではないか！

頭の中に響く声は、意気揚々と話してきた。それがなんだか子供っぽくて、少し笑つてしまつ。

？ なんだ？

「 何でも無いさ」

変な奴めと言いながら、また俺に身を預けてきた。

そして、俺は構えをとる。

右の掌は肩の高さまで上げ、突き出す。左は拳を作り脇を締め、構える。進行方向より後ろにある左足には、常にバネを効かせておく。重心は常に垂直。眼は、相手以外を認識しない。今度は隙無く、五感すべてを集中させよう。

わあ、これからが本番だ

そして、この狂った夜の中、俺の運命が動き出したのだと知った。

まずは相手の動きを止める事だけを考えろー。

「応ッ！」

相手の間合いと自分の間合いは、武器の差を考えると相手の方が有利だ。しかし、手数や射程、そのハンデをゼロにする程のパワーをこちらは持っている。

「……なら、おもくそぶん殴つて力チ上げるまでッ！」

霧散させた血液をカタパルトにして加速する。全身を押す力は相当の物で、少しでも加減を間違うと身体を串刺しにされてしまいそうだった。

一呼吸で距離は十から零になる。俺はタックルのインパクトと同時にサイドステップ。反撃を予測して行つた行動は、どうやら読まれていたみたいだつた。案の定、大剣を盾にした彼女は無傷。手には銃剣バイオネット。こちらの着地と同時に、ノーモーションからの射撃。

これ以上離れては彼奴のペースだぞ！

頭に響く声。俺だつてそのくらいは承知のつえだ。

「はつ。なら、壁ごとブチ抜くぜ？」

絶え間なく、的確に撃ち放たれる銃剣を、距離を離さないよつて避ける。避けながらも、俺は次の攻撃の準備にかかる。

血風を操るうちに理解した。ようは『イメージ』だ。速く翔けたいなら、加速すればいい。当たられたくないなれば、打ち払えばいい。そのために『力を利用』する。

そして『貫くイメージ』。

くつ……おい！ まだか！？

悪態を吐く右腕。というのも、俺が意識を左腕に集中させると身体の動きが止まつてしまつたため、その間は右腕に身体を預けていたのだ。

「……よし。OKだ

迫る刃を右腕が払いのける。盾の形をしているのは伊達じゃないらしく、その硬度は高いようだ。一瞬の隙を見て、再度加速。左腕は手刀を作り、さりにイメージを固める。

「オオオオオッ！」

三本の鞭を手刀に、そして腕にまで絡め、一本の突撃槍を作る。更に血風を纏わせ、超高速で渦巻く。

「貫けエエエッ！」

熱量×加速度×集中加重。衝突する大剣とドリル。火花を散らしながらも、ゆっくりと大剣は削られて

「ツー？」

上空から迫る殺意を、寸でで回避する。

……まあ、これだけ大きな隙を作ったのだからな。仕掛けでこない道理が無い

大剣を目隠しにして、その瞬間に跳躍。俺の隙だらけの背中目掛けで切りかかつたという訳か。

「くそ。動くなよ……」

結局振り出しに戻ってしまった。

「とりあえず動きを止めろ。……か」

手っ取り早く、四肢をもいでやりたいが、そんな隙があるワケがない。

「簡単に言つてくれるよ……なツー！」

一撃で済ませられないなら、連撃を食らわせている最中に隙を見付けるしかない。

「アアアツ！」

左腕の一撃をまたも大剣に抑えられる。今度はサイドではなく、上空へ飛び、蹴りを放つ。相手を確認する前に出した蹴りは、大きく空を切った。

「上だ！」

「ツー！」

目で確認するよりも速く、三本の鞭を走らせる。一息で切り伏せ

られる鞭。鋭い痛みに目が霞みそうになるが、攻撃の手は休めない。俺は更に槍状にした血風を放つ。今度は無理な体制から放つたせいか、狙いが大きくそれた。

「ええい！ 使えないヤツめッ！」

「なら、何があるのかよ！？」「

ふん。見くびるなよ！？

上空に居る相手に向かつて振り上がる右腕。

『銀鍵解放』！！

バキンと音を立てて割れる盾。まるで両開きの扉のように開いたそこから、仕掛けナイフよろしく飛び出す刃。

「これは……剣！？」

否ツ！

更に盾の両脇から、今度は折り畳みナイフのように現れる一本のレール。そしてそれは中央に現れた剣を固めるように重なる。

「これぞ我が真髓その一柱。砲撃鍵『レヴァンティー』！」

『魔を焼く焰』と呼ばれたその砲身は、白い炎を燃え上がらせ、月を背にした怪異を捕らえた。

そして、光の柱が天を突いた。

Blood*Beat

反動を空中で受け止めた身体が、コンクリートの床に叩き付けられる。堅い感触が背中を痺れさせた。

チッ……外したか！

悪態をついたアガートラームが、再び炎をその刃に宿らせる。

「な、何だよさつきのはー…？」

言つたろう？『レヴァンティー』と

得意げな口調が勘にさわるが、見たところ飛び道具である事は間違いないらしい。

上空から投げ付けられたバイアネットを、転がりながら避ける。起き上がった所を再び狙われたが、半歩踏み込みを入れてかわした。

「クソッ！ 上からじゃ狙い撃ちされっぱなしだぞ！？」

苦し紛れに床に刺さった剣を放つが、当たる寸前で霧散する。恐らく自分の能力をコントロールしているのだろう。

ふん。ならば左腕で引き摺り降ろさんか！

「んな事、やれたらとっくにケリ着いてるつてのー。」

ジクリと、一瞬だけ左腕が疼いた。「イツも自らの意思が有るつていうのか？

「使え……つて事かよ」

一層強く脈打つ左腕。俺は再び『鞭』のイメージを固める。

「行けえッ！」

降り注ぐ刃を打ち落としながら、鞭はまるでロケットのよつと上空の女に走る。

「散ツー！」

握った手を開くように、鞭を放射状に広げる。そこから更に相手を取り囲む様に、幽閉する様に鞭を走らせる。

（まだだ……ツ！ こんななんじや直ぐに破られちまつ！）

イメージをもつと鞆固なものへと昇華する。形作るのはキューブ。密度を上げ、四肢の動きを封じ、更に剣を鍊成させる空間を埋める事により、攻撃手段を奪う。あとは、『必殺の一撃』^{レガランティア}を食らわせだけだ！

…… オイ。一つ言つておくが、我は汝^{レガランティア}の考へてる様な物では…… 何か言つている様だつたが、構つてたら集中が乱れてしまう。そう、あと少しで完全に束縛出来るんだ…… あと、もう少し……

「よしつ！ 捕つた！」

まるで巨大なコンクリートブロックの様になつた血塊。その中心を貫通するように空いた空洞には、四肢の自由を奪われた身体があつた。

「オイ！ 動き止めたぞ！」

おのれ……話を聽かんのも兄弟そろつてか！？

そうほやきながらも、右腕はしっかりと標準を定めている。

汝も覺悟を決めろよ！？ アビリティーブレイカー…… シュート

オオオツ！

衝撃と閃光が、赤黒い血塊と、夜の闇と月明りさえも蹂躪した。

夢の中で、誰かが私に手を差し延べた。

Blood*Beat

「いっつけええええ」

轟音と共にソレを貫いた光は、膨張して球体になった。巨大な血塊ですら包み込んだ光は、表面に不思議な文字を浮かべると、ゆっくりと下に降りてきた。

「えええ……え？」

「血塊」と、まるで圧縮してしまったかの様に小さくなつた（とは言つても、一メートル位はあるが）光の玉は、屋上に降りて落ち着いた光を放つと、俺の方に『的』のよつた円を描いた。

「……オイ、これでやつつけられたのか？」

恐る恐る訪ねると
バカが

と、心無い返事が返つてきた。

本番はこれからだ。なに、お前の全力を叩き込めば（多分）終わるだろ？

「何が『（多分）』だよ……」

さつきまで場を占めていた張詰めた空気は消えていた。恐らく、完全に相手を封じる事には成功したようだ。

「で、この玉は何だよ。ヤツは中に凶るのか？」
「うむ。ソレについては否定はせんよ。なんなら確かめるか？」
ゆづくと右手が上ると、光の玉に共鳴するようにアガートラー

ム自体も淡く光だした。

「見れるのか……つて！ うああッ！？」

いや、もう何と言うかその。球体の中で、女の子が裸で浮かんでいるのだ。健全な学生として、動搖するのは当然だのに青いな

なんてケチつけるあたり、右腕の性格を疑つてしまつ。

「バカ！ 顔だけ確かめれりやいいんだつて！」

やれやれ。わがままな奴だ

と、顔だけ見れるくらいの穴を残して、球体は再び光を強めた。

「……」

その女の子には、どうも見覚えがある氣がする。何処でだらつ……どうした？

「……いや、見覚えがあるなつて」

確かに、全校集会とかでよく見たと思つ。生徒会のヤツか？ いや、だとしても何か足りない。

「メガネ……か？」

両手でわつかを作つて、女の子の顔に合せてみる。不格好ではあるが、雰囲気位なら出せるだらつ。

「……やつぱり」

なるほど、見覚えがある筈だ。何故ならこの娘は……

「委員長……だ」

？ なんだ、知り合いか？

知り合いも何も、クラスメイトの一人だ。

頭の中が、真っ白になつた。

兄さんを殺したヤツが。クラスメイトが。イコールで結び付いてしまつたからだろう。一生懸命に否定しようとした衝く思考回路が、同時に現実を受け止めようともがいていた。

思わず腰が抜けてしまつた俺は、力無く腰を降ろすほか無かつた。

肩にも、膝にも力が入らない。……入れようとも、思えない。

～～！…………～～！

アガートラームが何か言つてゐる氣がしたが、ソレすらも聞き取れない位に、頭の中は混乱していた。

「キサマツ！ 腐るのも大概にしろ！」

いつの間にか人の姿に戻つていたアガートラームが、俺の胸ぐらを掴んで怒鳴つた。小さな手には、それに似合わない程の力が込められているのが判る。

「…………でも、俺は」

「汝。さては殺める氣でいたな？」

「…………」

沈黙での肯定。疚しい氣持ちなんざ欠片も無かつたが、目の前の怒りに満ちたまなざしは、正直、正面から受け止めるには、俺には強すぎた。

「何処を見つかるのだッ！ しかと我を見よー！」

「だつて……俺。どう……したら」

「…………『だつて』だと？ 『どうしたら』だとッ！？ 甘つたれるなッ！？ ふざけるなッ！？ キサマ、それでもトーマの弟かッ！」

？

まるで、今まで我慢していたものを吐き出すように、彼女は怒鳴る。それは、迷子になつてしまつた子供の様に。助けを求めて足搔く、ぬれぎぬをかけられた死刑囚の様に。必死で、無我夢中の叫びだつた。

「…………こんな事では、ヤツに敵う道理が無い…………ッ！」

忌々しげに、彼女はそう呴いた。

「…………ヤツ…………？」

「フン。汝の様な『シヌケには関係の無い話だッ！

「ヤツつて…………誰だよ？』

『ヤツ』。訳も無く、それが心に引っ掛けた。

「誰だ？」

「……」

俺の問いを無視して、アガートラームは光の玉へ向き直った。どうやら、俺にやらせようとした事を自らの手で行つらう。が、そんな事はどうでもいい。

「ダレン NANDA『三』」

「……」

左腕が、ジクジクと疼きだす。

「オイ」

「ツ！？」

ひたすらに無視を決め込む少女の腕を『左手』で掴む。勿論、力の加減をできる程、俺は左腕に馴れていない。高温と、単純な力に呻くかと思いきや、少女は堪える様に身を震わせているだけだった。

「……トーマ（われら）の……敵だ」

「ツ！？」

言つている意味がよく判らなかつた。

「兄さんの……カタキ？」

力が抜けた隙に、左手が振りほどかれる。アガートラームの腕に痛々しく残つた火傷は、彼女が一・三度腕を振ると、たちまちに消えていった。

「ああ、そうだ」

「……じゃ、じゃあ委員長が殺したんじや……」

「ハツ、笑わせるな。このような小娘に殺られる様では、トーマはもつと早く死んでおるわ！」

「で、でも。兄さんを喰つたって……」

「『喰う』だと？」

頷く。彼女はしばらく考え込んでから、首を横に振つた。

「現状で答えを出すのは無理だが、誰かがこの娘の記憶に介入した可能性があるな」

「巻き込まれた……って事か？」

「そうとらえても間違いではあるまい」

頭が、ゆつくつといつもの調子を取り戻して来た。疼きも収まつていく。

「まあ、それも今に判るだろ？……よつ！」

不意に俺の右手を掴んだアガートラームは、再び腕に融合すると、レヴァンティーを展開させた。

「な、なんだよ！ 終わりじや無いのかよ！」

たわけ！ アビリティ 能力の暴走は、ユガ 術者の精神に多大な負荷をかける。下手をしたら廢人だぞ？

「……マジかよ」

到底冗談とはとれない剣幕に、事の重大さを痛感された。

「……『全力の一撃』。か？」

勿論、と応える右腕。

「そんな事したら、俺は」

『人殺し』か？

言い当てられ、ビクリと肩が震えた。臆するな。そんな事はさせんよ

「信じて……いいのか？」

俺は、不安に満ちた心のまま、問い合わせた。

我を信じろ

そして、右腕は、彼女は、満ちた不安を振り払うかの様に、そう言つた。

左腕は、熱く、猛々しく。右腕は、清く、気高く。俺の中で、三つの鼓動が重なつていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914a/>

Blood*Beat -Act.K-

2010年10月29日13時20分発行